

遠慮なく、時代の流れに乗ろう



宮田幹二

大阪大学産業科学研究所
[567-0047] 茨木市美穂ヶ丘8-1
招へい教授, 工学博士.
専門は包接化合物, 分子認識, 有機結晶.
miyata@mls.eng.osaka-u.ac.jp
www.sanken.osaka-u.ac.jp

1981年、当時は西ドイツであったが、南西部にあるシュツットガルト大学に一年間留学することができた。日々見聞する物事が新鮮で、歴史を感じる旧市街や田舎の美しさに感動する時を過ごした。次第に、ドイツ語情報への理解度が高まり、社会問題も見えてきた。たとえば、酸性雨による森林破壊などの環境破壊が進み、若者世代の失業率が10%を超え、少子高齢化が進んでいた。大学では、化学系学生の男女比がほぼ等しく、外国人留学生も多かった。研究室の雰囲気は、予想以上に日本とは異なっていた。薬品管理は厳重で、排気や空調設備は十分に整備され、出入口の鍵も多かった。

帰国後、三十年余り経ったが、この間ドイツで見聞したことが、日本でも次々と起こった。暫くは不思議だなど感じていたが、次第に当然かと思うようになった。欧米型民主主義はそれなりに方向性があり、社会が変化するのであろう。経済の成熟にともない、欧米社会が辿った道筋を何十年かの遅れで、日本も歩んでいるのだと。ごく自然と、次のような発想に至る。ドイツで見聞したことで、いまだに日本で達成されていないことは、何だろうか。

最近、日本社会での女性の活動について、ようやく大きな潮流変化が起きている。今後、十年、二十年が過ぎれば、きっと、あのような時代もあったなあ、と懐かしむときが来るだろう。初めは強制的なように感じることも、合理性があれば民主社会では次第に浸透することになる。例えとしては良くないかもしれないが、禁煙がここ十年で日本社会に定着したのと同じように。

振り返ると、1989年の東西冷戦終結による世界の激変と日本経済のバブル崩壊のため、日本は大きく揺さぶられた。さらに円高とデフレに見舞われ、アジア諸国の経済が発展し、多くの企業が海外に進出した。インターネットの発展による国際化が急速に進む中で、日本でも女性の社会進出はもはや止めようがないであ

ろう。個人的予想より、二十年は遅れてしまったが。

1978年結婚以来、共働きが続いた。筆者は2013年3月大阪大学を、妻はあと一年余で神戸薬科大学を定年退職する。この欄の執筆を機会に、ここまで続けられた理由を考えてみた。一つ目、大変お世話になった恩師をはじめとする諸先生方のご理解である。結婚当時、妻は神戸女子薬科大学の助手で、女性の先生方は珍しくなかった。二つ目、一女を授かってからは、全面的に妻の両親のお世話になった。筆者の長姉夫婦も共働きを続けていた。三つ目、強い反対者に出会わなかった。筆者の身勝手か、お互いに楽道家なのか、共働きの是非について、これまで深く議論した覚えがない。四つ目、妻は同時期にスイス国境にあるコンスタンツ大学に留学し、ドイツ滞在の貴重な経験を共有できた。どちらも初めての単身生活であったが、研究室中心の生活を楽しみ、研究を発展させることができた。五つ目、男女共学となり、神戸薬科大学と名称変更したが、妻は同じ研究室でずっと勤務し、有機合成化学に基づく薬品化学の教育研究の虜になった。それほどお喋りではなかった人が、若い男女学生に囲まれて生き生きと研究指導に従事している。

ワーキングシェアは進むだろうか。休暇をフルに使い、人生を多角的に楽しむことをお互いに認め合えるだろうか。周辺諸国との交流と友好を深めていけるだろうか。国境を接する欧州諸国では、過去に幾多の戦争があり、現在も武力紛争が絶えない。多民族、多言語、多文化の集合体では、多様性を認め合うことは平和のために欠かせない。

思い起こせば、家族の援助を得て、役割分担などを考えることもなく、お互いに異なる研究を楽しみながら、三十五年余が瞬く間に過ぎたような気がする。でも、いまだに日本では異性の目をじっと見つめて、会話するのが難しい。ドイツでは普通だったが。